

令和の首里城復興 Zoom 座談会 第1回「首里城復興の意義について」
実施概要

【日時】2020年12月9日(水)14:00~16:00

【登壇者】(☆…進行・ファシリテーター)

- ・高良倉吉(琉球大学名誉教授、首里城復元に向けた技術検討委員会委員長)
- ・伊良波朝義(NPO法人首里まちづくり研究会理事長)
- ☆崎山律子(那覇市文化協会会長、首里城復興基本計画に関する有識者懇談会委員)

【座談会概要】

1. 令和の復興とは。国の進める復元と、県の進める復興の違い、それぞれの意義とは。

- 1年前の首里城の火災は衝撃的な出来事だったと思うが、その翌日には若い人たちが学校前で募金を呼びかけるなど、国や県や市ではなく一市民たちが積極的にその足で立ち上がって呼び掛けていた。それが前回の首里城復元とは大きく違うことで、今回の首里城の再建に向けて力強い推進力になると感じた。(崎山)
- 首里城火災のニュースで若い方々が涙を流している光景が飛び込んできた。30年前の復元とは違って、大切なものを失ったと感じてくれる若い方々がいるのだと、本当に強いメッセージを感じた。(高良)
- 平成の復元の最大のテーマは、首里城という建築空間を誰の目にもよくわかるよう復元するということだった。宮古や八重山の方から権力の象徴を復元するののかという意見もあったが「蘇ったあのかたちは権力の象徴ではない。木を削って組み合わせ、瓦を焼いて、首里城をつくったのは庶民なのだ。いわば王国時代の首里城は、当時の庶民の技術力と美意識が集約された象徴であり、それが蘇ったのである」と説明した。完成した首里城は、首里の古来たちも見たことがない王国時代の姿で、誰もが初めて首里城を見た、それが平成の復元だった。そうして歴史や文化の象徴がみんなでも共有できるかたちにはなったが、平成の復元は国が主導し、かつスケジュールがタイトであったため、当時の復元は、蘇っていく姿を県民と深く共有するものではなかった。しかし、30年経ち、首里城が失われて若い人々が涙を流した。平成の復元は、時間をかけながら、静かに、人々に届いていたのだなと感じた。(高良)
- 焼失前の首里城は県民に開かれた場所ではなく身近に行事を行うことはなかった。身近に感じる場所ではなかったように感じる。(伊良波)
- 令和の復元の最大のテーマは、防災対策・防火対策になるだろう。最新の設備を整え、日頃の訓練などのソフト面も強化して、何百年、何千年後にバトンタッチできる首里城にしたい。ひとつひとつ課題のクリアに向けて話を進めているところである。首里城焼失とともに展示収蔵されていた工芸品なども焼けてしまった。この反省を踏まえ、収蔵品等の防火対策についても検討を進めている。(高良)
- 平成の復元では資料に基づいて復元が行われ、根拠のないものは復元しないという方針だった。龍柱の向きについても、前回の復元時にあった資料に基づいて議論して決定されたもので、新たな資料が見つければそれに基づいて、きちんとした理由を並べて、決定していけばよい。焦る必要はない。十分にみんなで議論して決めていけばよい。(高良)
- 首里城は復元されて30年程度で焼失してしまったが、本来はそうそう失われるような建物ではない。防火対策は万全にするという話もあり、再建された後は50年、100年は存在する建物になる。なので、焦って吟味しないまま進めるべきではないし、丁寧に復元する必要があると思う。これは首里城の正殿だけではなく、首里城公園内の舗装などもそうだ。時代背景に基づいて専門家を入れて検証した上で進めてもらいたい。(伊良波)

2. 復興における周辺まちづくりへの期待

- 2012年に「古都首里の風景のあるまちづくり調査」を実施した。首里城を中心としたまちづくりの気運を高める取り組みを進めている。県の「首里城復興基本計画」に対し、首里城のお膝元の地域住民の声を届けるため、シンポジウムも開催している。現代にあった首里のまちをどうするのか、交通問題をどうするのかなどの意見がでていいる。交通問題は首里城があるがゆえの問題でもあり、6年後に正殿が復元されたときに同じ問題が起こらないよう議論を進めていきたい。高齢化による交通弱者や買い物難民の課題も地域にとっては大きな問題であり、首里城復興と共に首里のまちを考えるきっかけとなるとよい。(伊良波)
- 伊良波さんの話を聞いて思うことは、首里城の城下町に住んでいる地域住民の視点から考える必要があるということ。国、県、那覇市含めて真剣に議論するべきだと思う。現在首里は通過地点となっている。将来的に首里のまちを歩いて楽しむ方向に向かうためにも、首里城という核になる施設だけではなく、その周辺の文化財も整備していく必要がある。さらに住んでいる方々の利便性を確保して、いかに地域のホスピタリティを確保していくかが重要である。(高良)
- 沖縄全体が観光地として捉えた場合には、「観光立県沖縄」としてどんな魅力を演出して行くかが重要。今回の首里のまちを考えることは、観光立県沖縄が離島も含めて、観光が自分たちの生活とどう重なっていくかを考える機会だと思う。(崎山)
- 首里に住んでいても首里の歴史文化を知らない人も多い。今年から「首里まち塾」という歴史文化を学ぶ場づくりをはじめた。住んでいる地域をより深く知ることによって、愛着も湧き誇りに思える。住んでいる人が誇りに思わなくてはホスピタリティも生まれにくい。他の地域でも起こりうることなので、地域を知ってもらう活動を続けていくことが、沖縄が持っているホスピタリティを広げる活動につながるのだと思う。(伊良波)
- 首里城と玉陵はワンセットで、東側にこの世の首里城、西側にあの世の首里城(玉陵)というひとつの世界観がある。そういう意味では、首里城だけではなく、周辺文化財も含めて首里のまちができていいるということは重要だと思う。更にいえば、首里のまちはアジアとの交流の結晶ともいえるが、琉球的こだわり・価値観でディスプレイされており、首里を歩くことでしか発見できない。(高良)
- 首里城の復興・復元だけではなく、街自体が魅力的でなくてはいけない。私としては街中に緑が圧倒的に足りていないと感じている。(伊良波)
- 琉球王国時代の記録をみると、計画的に緑を育てていることがわかる。琉球は木材を自給自足するため計画的に育てていた。また、集落の周りに緑を育てたり基幹道を松並木にしたり、離島では抱護といって海岸線にグリーンベルトをつくったりする。これらは台風の風避けになったり潮風を避けたりする役割があり、生きるために必要なものだった。(高良)

3. 県民、来訪者にとっての首里城復興への期待

- 沖縄県では国や財団とともに、焼け残った瓦の漆喰を剥がすボランティアなど、様々な事業を実施している。一人ひとりが首里城に関わる場面ができたことは、平成の復元とは違うと感じている。何より、県民の関心も高く、自分たちが何かできないかという意識がある。復元して終わりではなく、自分たちの祖先がアジアと交流しながら築いてきた、文化芸能、方言、歴史、そういった先人たちの歩みを学んでいくことが大切で、その勉強の拠点が首里だと思う。(高良)
- 文化財は完成して活用されて生きるものだと思う。例えば龍潭は公園化になったとたんに

簡単には利用できなくなった。地域の伝統行事などに首里城を活用できる仕組みづくりができれば、愛される場所、子どもたちが特に誇らしく思う場所になると思う。(伊良波)

- 火災で被害を受けた工芸品をはじめ、文化財は経年劣化していくため、その復元に向けた技術は必要になる。また、元々は琉球にあったものが海外の博物館にある。それらを定期的に借りて沖縄で里帰り展をすとか、衣装の傷んだものを沖縄で預かって修復するなどをしてもよいのではないか。技術者・スペシャリストを沖縄で育成する仕組みをつくるのが長い目でみると絶対に必要である。これがなくては、沖縄の文化は百年、千年と継承することはできない。大切な視点である。文化遺産をきちんと守り、修理して伝えていくという、長いバトンタッチの意識が必要である。(高良)
- 具体的にイメージできるものを作り上げ、共有することが平成の復元だった。令和の復元は、建物の再現だけで終わらせるのではなく、先人が積み上げてきた「琉球」というものを改めて現代の我々が再評価・再認識して、自分たちは何ができるかを考える、みんなが、つまり様々な地域や様々な年代で等身大に考えるときなのではないか。(高良)
- 県民のみならず県外・国外の人たちも含めて関心を寄せてくれていると思う。直接手を差し伸べなくても、今回はもう一度文化を見直す、そういった心の復興ではないかと思っている。首里だけではなくほかの地域も含めてまちづくりを考え直すきっかけとなっているのではないか。沖縄全体が思いをひとつにして、首里城を再現できればよい。(伊良波)
- 沖縄の文化とは何かと研究を続けてきたがまだわからない。確かなことは、琉球は島ごとに個性があり、文化がある。バリエーションが豊かで、その個性が大切である。同時に、全体を貫く共通のものもある。それは工芸技術だったり、航海安全を祈るという行為だったりする。祈りというベースの上に、工芸だったり芸能だったり行事だったり表現されている。首里城にも祈りの場所が多く、花開いた沖縄の文化の根っこにあるものは、そういったものだと思う。(高良)
- 今は県外・国外出身の方が沖縄に住んでおり、ネイティブなウチナンチュとともに新しいウチナンチュが増えてきた。沖縄は伝統的なスピリットを大切にするが、排除するのではなく、一緒に沖縄を作っていく文化があると思う。首里城に関しても閉じてしまった文化ではなく、いつでも開かれているほうがよい。令和の復興も、新しいウチナンチュという人たちも含めて、みんなで沖縄を支えて発展させ将来のあり方を考えていくとよい。かつての琉球がそうであったように、しなやかに開かれたスタンスでいることが大切だと思う。(高良)
- 首里城を中心とした様々な工芸品が全県に広がっている。工芸文化は王国時代から連綿と受け継がれている歴史があるが、実際のところ、業界は逼迫している。県民が意識を持って、琉球が培ってきた工芸品を何かひとつ身近において使うことが復興につながるかなと思う。(伊良波)

(視聴者からの質問)

《首里城北殿に例えば紅型工房やスタジオ等も入れて、観光客が製造過程を見たり、触れたり、紅型衣装の記念撮影、販売も行うことで王朝文化を体感させ、理解を深め、工芸に携わる人の収入も確保していただくことができるのではないのでしょうか。復元にあたって、このような機能についても検討していく余地はあるのでしょうか。また、これは沖縄県が中心になり、県民と共に取り組むべきと思いますが、いかがでしょうか?》

- 北殿も南殿も焼けてしまったので、それを再建してどう使うかはこれから検討される。その検討作業の中心になるのは県である。県民の意見や、かつての北殿・南殿の使われ方、

管理のしやすさなども含めて検討が進むだろう。(高良)

- 紅型や織物、漆器や焼物、お酒も含めて、首里城内がよいのかという議論はあるだろうが、そういった施設が首里にあるのはよいことだと思う。(伊良波)

《ゆっくり考えていくことも大切とお話がありました。消失したものの再現以外に、改めて考えていくとしたらなんですか？》

- 私は、今は目の前の課題と格闘しているところで、焼けてしまったものを再建することではいいないので、今はその質問には答えられない。(高良)
- 伝統文化との融合が足りなかったと思うので、ソフト面を含めてどういう活用方法があるのかを時間をかけて検討することが大切だと思う。(伊良波)
- 首里城で芸能の演出をするときも、今後はいろんな検討が必要だろう。演目についても、首里城が離島も含めた周辺地域から吸い上げたもので結実した文化なので、各地域の民俗芸能を改めて首里城で再現するというのもあってよいのではないかと。(崎山)

《公園になることで少し遠い存在になったというお話がありました。観光客が行くところというイメージもあります。県民が親しみやすくなるには？》

- 公園の管理が県に移管されるにあたり、どういった活用方法が好ましいかヒアリングがあった。なんでもよいわけではなく、ある程度の線引きはした上で活用する仕組みができれば、地域、特に子どもたちがより身近に感じることができる。活用をどうするかが重要。(伊良波)
- 令和の復元に関しては、スタートしたときから、県民のみならず県外・国外も含めて、復元過程は見ただけというものは一貫している。「見せる復元」で、皆が参加できる再建にしたい。(高良)
- 「見せる復元」、大賛成。子どもたちを招待するなど、子どもたちが見られる環境にしてみたい。(伊良波)

《再建に関する技術的な面については、学術的な議論をベースに国のほうでも現在検討をされていると思います。今後、「愛される首里城」「活用できる首里城」をめざすには、運営に関して、国営区域・県営区域を分けしない一体的な議論が必要だと思います。こうした議論の場には県民の意見を幅広く募って、是々非々で議論を進めていけたらと考えるんですが、今後こうした運営に関する議論の場は設けられるのでしょうか？高良先生、伊良波さんはどう思われますか？》

- 国営公園と県営公園の事業があるが、きちんと国と県は情報共有をして議論を進めている。意見交換の結果、決まったことは定期的にメディアに公開している。復元の検討過程は必要なポイントで説明することになると思う。それと同時に県民の意見を広くきくということは大いにやってよいと思う。(高良)
- 地域では、観光と首里まちづくりというテーマで議論を進めてきており、まとまった意見は那覇市等にも提出する予定である。それで終わるのではなく、管理運営についても行政や県立芸大などのつながりをつくって、常に議論ができるプラットフォームのようなものがいいと感じる。(伊良波)

(首里城復興基本方針について)

- 「首里城復興基本方針」を読んで共感した。首里というまちをどう整備していくか、そこを中心として沖縄の文化や活力をどう磨いていこうかという、フィロソフィが入っている

る。将来を考えるビジョンとしてはよくできたビジョンだと思う。(高良)

- 「首里城復興基本方針」はよくまとめられているが、どう実行していくのかが鍵。絵に描いた餅ではなく、実行していくための体制づくりをお願いしたい。(伊良波)